つながりをつくる・くらしをささえる・活動をひろげる

社協で働く私の仕事

社会福祉協議会（略称：社協）は、社会福祉法に基づき、「地域福祉の推進」を目的として、さまざまな事業を展開しています。例えば、地域での福祉活動の立上げや継続の支援、ボランティアの育成、関係団体のネットワークづくりといった「地域支援」や、生活にお困りの方や高齢者への相談支援といった一人ひとりの暮らしを支える「個別支援」を進めています。

▲大阪市立社会福祉センターで開かれた法人就職説明会のようす

そんな社協の仕事について身近に感じていただくきっかけとなるよう、今月号では入職2年目の栗川朋佳さんと5年目の泉颯斗さんに、社協を志したきっかけや担当している仕事、そこに込める思いをインタビュー形式でお届けします。

※本記事は、4月26日に開催した市社協法人就職説明会の内容をもとに編集しています。

入職2年目

栗川（くりかわ）　朋佳（ともか）さん

令和3年4月入職

西成区社会福祉協議会　地域支援担当

〈栗川さんの話〉

―社協職員を志したきっかけは？

人と関わることが好きで、同じ目標に向かってたくさんの人と一緒に何かをやり遂げられる仕事につきたいと考えていました。資格取得のための実習で社協に行ったこともあり、制度の狭間の問題に対応できる社協をめざすことにしました。

―担当している仕事内容は？

主にボランティア担当をしています。各区社協にあるボランティア・市民活動センターでは、ボランティアをしたい人とボランティアに来てほしい人をつなぐ役割があります。活動のサポートだけでなく、地域住民の居場所づくりや、新たな活動者の発掘、センターの周知という意味合いを込めて「講座」を開催します。令和3年度は、コロナ禍でボランティアさんの活動先が少なく、活動者のモチベーションを維持する難しさを感じながらも、「今だからこそ何ができるか」をボランティアさんと一緒に考えた一年でした。

他にも、体験や座学を通して福祉について知るきっかけづくりの場となるよう、福祉教育をおこなっています。福祉教育のプログラムとしては当事者による講話や車いすなどの疑似体験、ボッチャなどの障がい者スポーツ体験などがあります。実施した際に「障がいのある人は大変」「自分には関係のない話」などネガティブな印象、無関心で終わらないように、誰もが暮らしやすいまちづくりのために、どのような言葉で伝えればいいのかを考えながら取り組んでいます。準備を進めるなかで、自分自身も福祉に対する学びが深まってきたと感じています。

―社協職員としての仕事のやりがいは？

1年目は住民やボランティアの方に名前を覚えてもらうことを目標にしていたので、お会いした時は必ず声をかけること、しっかりと自分の名前を伝えることを心がけました。その結果、関係がつくれただけでなく、「成長したね」などと声をかけてもらえることも増えて嬉しかったです。

―今後、取り組みたいと考えていることは？

コロナの影響で、区ボランティア・市民活動センターの登録ボランティアが活動できる機会が

▲特別養護老人ホームでおこなわれている園芸ボランティア

減っているという状況がまだ続いていて、電話でしか話したことがない方もいます。なので、個人やグループでどのような活動をされているのか、どのような想いでされているのかを知り、関係を築いていきたいです。また、ボランティア交流会など、他の活動者がどのように活動しているのか知り、自身の活動のヒントになる情報交換ができるような機会をつくることができればと考えています。

2年目も住民や活動者の方々を大事にし、皆さんの想いをカタチにできる関わり方をしていきたいと思います。

▲中学校で福祉教育をしている栗川さん

入職 5年目

泉（いずみ）　颯斗（はやと）さん

平成30年4月入職　西成区社会福祉協議会　地域包括支援センター配属

令和4年4月　大阪市ボランティア・市民活動センター配属

〈泉さんの話〉

―社協職員を志したきっかけは？

学生の頃、福祉の道に進みたいと強く考えていたわけではなかったのですが、福祉について学ぶうちに、地域の方と協働しながら地域の居場所づくりをしたり、地域福祉を推進していく仕事がしたいと考えて志しました。

―担当してきた仕事内容は？

入職時に担当していた地域包括支援センターは、高齢者の相談を受ける役割があります。相談に来られた方の話を聞き、どのように解決していくかを相談者と一緒に考えながら、必要に応じて関係機関や制度につなぎます。

高齢者の困りごとといっても、介護保険に関することだけではなく、介護予防や認知症に関することなどさまざまです。区社協内の他部署や関係機関と連携しながら、相談者が安心して暮らし続けることができるように、サポートします。相談が来ることを待っているだけではなく、実際に出かけ、気になるご近所さんのことを住民から相談してもらえるような関係づくりや周知にも取り組んできました。

―社協職員としての仕事のやりがいは？

近隣住民から相談のあった高齢男性を支援したときの話です。お会いした当初は、足腰はふらふらで買い物すらままならない状態でした。一緒に困りごとを解決したいと伝えても、「病院には行きたくない。介護もいらん。家にも来るな」と受け入れていただけませんでした。しかし、めげずに訪問を重ねて関係を築いたことで、相談者の意向を聞くことが増え、なんとか通院や介護保険申請につなげることができました。そして、「最初はあんなにキツくあたってしまって堪忍な。また顔を見せに来てほしい。ありがとう」と満面の笑顔で言ってもらえました。その時に表現しがたい嬉しさとやりがいを感じました。

―今後の展望については？

社協職員として5年目を迎え現在では、いわゆる「中堅職員」と呼ばれるようになりました。入職当時を振り返ると、目の前の業務をこなすことに精いっぱいで、職場や職員など、周りを見る余裕がなかったように思います。また、そうなることで、地域の方々と関わる際にどうしても「自分に余裕がない」状態になってしまい、自分本位な姿勢での関わりになってしまうことがありました。

しかし、中堅職員となった今、より一層の周囲（地域・関係機関・職員）と協働していく力が必要だと感じています。そのためにも、さまざまな方面へのアンテナを張り巡らせることで経験を積み、見識を広げ、地域の方々と関わる際の自身の引き出しをより多く準備し、「泉」の良さを最大限に活かして、地域をはじめ、関係機関や職員へのはたらきかけを強めていけたらと考えています。

▲介護保険や認知症について出前講座

▲ケアマネジャーと一緒に訪問し相談者と面談

「大阪の社会福祉」はNHK歳末助け合い助成金を活用して発行しています。